2023年度ヴェネツィア　カ・フォスカリ大学短期研修報告

文化学部　3回生

（1）活動概要

2023年9月18日から約1週間、ヴェネツィア　カ・フォスカリ大学短期研修に参加した。漢字や書道、自由会話などの大学の授業に参加し、日本語学科の学生と交流した。また、授業の時間をお借りして、高知県立大学の学生による日本や高知についてのプレゼンテーションを行い、一緒によさこいを踊ったり、折り紙を通して交流をした。授業時間外は一緒に食事に行ったり、思い思いの会話をして交流を深めた。キャンパスツアーにも参加し、大学の建物や歴史、日本との関わりなどの詳しい説明を聞いてたくさんのことを学んだ。週末は、日本語学科の学生にヴェネツィアを案内してもらい、サン・マルコ広場やリアルト橋、サン・ジョルジョ・マッジョーレ島を訪れ、建築や街の歴史を学んだ。美術館やヴィヴァルディのコンサートにも行き、芸術や音楽などの文化にも触れた。また、ガラスで有名なムラーノ島、レースやカラフルな街並みで有名なブラーノ島を訪れ、伝統工芸品についても学んだ。日本語学科の学生がおすすめしてくれたお店でイタリア料理を食べたり、食文化にも触れた。

（2）研修での学び・気づき

研修ではイタリアやヴェネツィアのさまざまな文化に触れ、多くのことを学んだ。ヴェネツィアに到着して一番はじめに気がついたことは、移動の手段として徒歩や船が主流だということである。日本では車やバス、電車、自転車などが移動手段として主流であるが、ヴェネツィアで陸を移動するときは徒歩に限定される。車やバスは走っていない。ヴェネツィアにはたくさんの水路があり、道もそんなに広くはなく、水路を渡るための橋も階段になっているため、車やバスなどの乗り物が通ることができず、徒歩での移動が主流となっている。水路には水上バスや水上ボートが多く行き来しているため、ヴェネツィアでの移動手段として、徒歩や船が主流であるという日本との違いを、身をもって体感することができた。

日本との大きな違いで目に入ったのは建築物である。ヴェネツィアには歴史のありそうな建物が多く、雰囲気のある街並みだった。ヴェネツィアでは昔からの建物がそのまま使われているらしい。カ・フォスカリ大学の本部の建物も、邸宅を改装して使われているものだということをお聞きした。日本で建物を新しくする時には、もともとある建物を一度壊してから新しく立て直したり、内装と外装の両方をリフォームすることが多い。しかし、ヴェネツィアでは外装はそのまま残して内装だけ新しくすることが多いそうだ。そのため、外装に雰囲気があっても内装は新しいという建物がよくあるという話をお聞きして、ヴェネツィアの建築物について学んだ。

また、研修ではたくさんの現地の方と関わりを持ち、人柄の良さに触れることができた。日本語学科の学生はとても親切で、友好的であったという印象が強く残っている。授業で交流した学生はとても親切で、分からないことを丁寧に教えてくれたり、ヴェネツィアでおすすめの場所を教えてくれた。日本語がとても上手で学びに対する意欲があり、私たちとの交流に対しても積極的な姿勢を見せてくれた。授業外の時間にも一緒に食事をしたり、ヴェネツィアの街を案内してくれたり、とても意義のある交流ができた。ヴェネツィアの街中を歩いていた時に、私たちに気が付いて声をかけてくれた学生もいた。同じ宿泊所に滞在していた人やショップの店員もとても親切で友好的であった。日本では店員が一方的に挨拶をすることが多いけれど、ヴェネツィアではお客さんも挨拶を返していて、すてきな文化だと感じた。私たちが日本人だと分かると、日本語で「こんにちは」や「ありがとう」などと自分が知っている日本語で声をかけてくれることもあり、うれしく思う場面もあった。現地の方との関わりを通して、人との接し方が日本とは違って友好的だと感じた。

食事をしたときも日本との違いを感じた。日本では席に案内されると無料で水が提供されるが、イタリアでは注文をしないと提供されないため、日本との違いを感じた。また、イタリアでは人数分メニューが配られる。日本では席に 2 つほどメニューが置いてあって、みんなで一緒にメニューを見て料理を注文するが、イタリアでは一人一つずつメニューが配られるので、一人でじっくり食べたいものを決めることができる。どの時間帯であってもお店の中ではなく、屋外でお酒と一緒に食事を楽しんでいる人の姿も多く見られたため、日本との違いを感じた。ピザやパスタもイタリア特有のものがあって、日本との違いを実感した。ヴェネツィアで食べた本場のイタリア料理はどれも本当に美味しくて、機会があったらまた食べたいと思っている。

（3）その他

海外の生活様式や文化に興味があったため、今回の研修に参加して本当に良かったと感じている。日本語学科の学生との交流を通して、旅行に行くだけでは分からないイタリアの文化を教えてもらったり、自分の疑問に対して実際に現地で生活している人の声を聴くことができて、実りある研修になったと考える。現地の生活様式や食、建築や芸術、音楽などさまざまな文化を自分の目で見て、耳で聞いて、肌で感じることによって、貴重な体験ができたと感じる。一週間という短い期間の研修ではあったものの、たくさんのことを経験しながら学ぶことができて、自分の海外の生活様式や文化に対する興味がますます深まった。また機会があれば、興味を追究するために海外へ行き、たくさんの体験をして学びを深めたり、自分の視野を広げていきたいと考える。また、今回の研修で得たものを自分の中で大切にして、生かしていきたい。実りある研修になったのは、たくさんの方々の協力や手助けがあってこそのものなので、心から感謝したい。

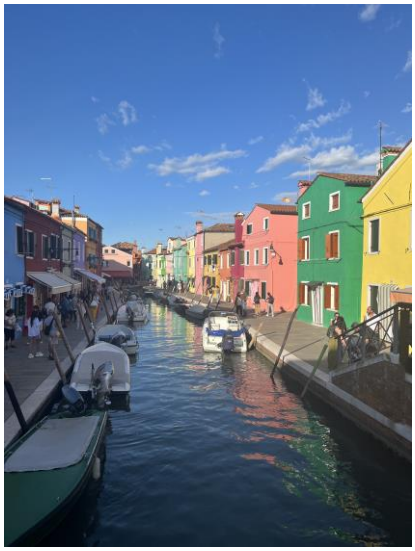
（4）研修先での写真

カ・フォスカリ大学本部

アカデミア美術館

サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会

リアルト橋から見た風景



ブラーノ島の街並み

ムラーノ・ガラス美術館

2023 年度

ヴェネツィア　カ・フォスカリ大学短期研修報告書

文化学部　2 回生

(1) 活動概要
(2) 研修での学び・気づき
(3) その他
(4) 研修先の写真

(1) 活動概要

今回私は、本学の短期研修プログラムの一つである、7 泊 8 日のカ・フォスカリ大学短期研修に参加した。往復丸二日かけてのイタリアまでの道のりは、初めての海外だった私にとってはとても長かったが、大いに充実した一週間を過ごすことができた。

ヴェネツィアについてからはじめの三日間は、カ・フォスカリ大学で行われている日本語学科の授業を見学、参加し、現地の学生との交流を深めた。その一環として、私たちも事前に用意していった日本の文化に関するプレゼンテーションを行った。私は、大学でよさこいサークルに所属し活動しているため、ほかのメンバーとも協力して、高知のよさこいについてのプレゼンテーションをしたが、このときのことは (2) で詳しく触れたいと思う。プレゼンテーション以外には、日本語を使った自由会話の授業や漢字の授業、私たちの研修期間にたまたま行われていた習字のワークショップなど、さまざまな授業に参加でき、たくさんの学生と交流した。

残りの三日間では、キャンパスツアーと、それぞれの設定した課題解決に向けて、ヴェネツィアの歴史や文化を感じられる場所をめぐりながら、観光を楽しんだ。先のカ・フォスカリ大学での授業を通した学生との交流のなかで、連絡を取り合い、うち二日間は学生たちの案内のもとで回ることができた。この三日間のことは (3) で詳しく触れるつもりだ。

同じホテルで同じメンバーと過ごした一週間はとても濃いもので、それぞれ元々友達同士で応募した人は今回はいなかったが、全員がやさしく、楽しんで研修を終えることができた。

(2) 研修での学び・気づき

ここであげられる大きな学びとしては、やはりカ・フォスカリ大学で行った日本の文化に関するプレゼンテーションである。

はじめ、準備段階から異文化圏の学生たちにどうやったら楽しんでよさこいを知ることができるか、よさこい鳴子祭り自体の雰囲気を伝えることができるか、とても悩まされた。

一つの伝統ある文化として歴史的背景をふまえつつ、それでも、私たちが一番伝えたいのは、よさこいの街として活気あふれる高知の魅力だった。考えた結果、ある有名企業チームの動画と正調よさこいの振り体験を入れ、私たちも今夏の実際の衣装を着て、プレゼンテーションを行うことにした。

結果としてはとても盛り上がる発表になった。やはり、実際に今年のよさこい鳴子祭りの映像を用いたことで、観客との距離が近く、まちなかを踊りながら練り歩く雰囲気を伝えることができたと思う。それぞれのチームごとに毎年新しい曲、衣装、地方車をそろえるのだと話すとどの学生もとても驚いていた。正調よさこいの体験のときには、はじめこそ緊張していた学生たちも、簡単でリズムに乗った振り付けを一緒に繰り返していくうちに「もう一回、もう一回」とノリノリで楽しんでくれていた。私が、前に出て皆に解説しながら見せた振りを、数十人のイタリア人が喜んで真似して踊るその光景は、とても面白くて、私自身のなかにもとても印象深く残っている。特に楽しそうにしていた学生に鳴子を手渡すと、はじめは物珍しそうにして用心深くしていたが、私が持ち方と鳴らし方を教えるとすぐに覚えてしまう学生もいて、驚かされた。

私がはじめて高知のよさこいを体験した一年前の感動を、すべて伝えることは難しくとも、ともに海を越えて味わうことができてとても嬉しかった。

プレゼンテーション以外の授業では、主に自由会話の授業に参加したが、学生たちの日本語の上手さにまた驚かされた。「本当に日本語上手だね」と話すと「いえいえ、上手ないです」と首を振って謙遜する姿も、また日本人のようで面白かった。日本語学科に通っているぐらい日本に特に興味を持っている学生たちに、どうして日本語を勉強しようと思ったのかたくさんの話を聞いた。以前日本に旅行した時にコミュニケーションが取れなかったのが悔しかったり、日本の神社や寺などの文化が好きだったり、さまざまだったが、実際に聞いて分かったのは、まんがやアニメなどのクールジャパンから日本が好きになるのは、もはや一昔前の感覚であるということだ。もちろんまんが、アニメ、ゲームが好きな学生も多くいたが、今やそればかりではなくなっていることに気が付いた。

(3) その他

後半の日程では、メンバーでリストアップした建造物や施設をまわったり、学生たちに教えてもらったおすすめのご飯屋さんで食事を楽しんだりした。

ヴェネツィアには歴史ある建造物がたくさんあり、何度も感動したが、最も驚かされたのははじめてサン・マルコ寺院を見たときである。サン・マルコ寺院はサン・マルコ広場にある、日本の京都でいう金閣のような鉄板観光スポットの一つだ。実際、事前にヴェネツィアについて、さまざまな観光ガイドブックや観光ガイドサイトを見て調べていたが、どのメディアにも取り上げられていた。そのため特に期待が高かった場所の一つでもあったが、目の前にするとその迫力に大きく驚かされた。有名観光地なだけあり混みあってはいたが、それでも多くの人が一目見たいと思うのは納得の美しさだった。

景色の美しさでいうと、サンジョルジョ・マッジョーレ島の教会とその鐘楼からみた絶景も忘れられない。サンジョルジョ・マッジョーレ島は、サン・マルコ広場からヴァポレット（ヴェネツィアの水上バス）ですぐのところにある、島全体で一つの教会になっている島である。ヴェネツィアは雨の少ない気候であるとはいえ、滞在期間のなかでも断トツに晴れていた日に訪れることができて、とても嬉しかった。

最終日には、朝からヴァポレットに乗ってヴェネツィアの島から少し離れたムラーノ島、ブラーノ島へと出かけた。ムラーノ島はガラスの工芸品で伝統ある島として有名だが、島にあるムラーノガラス博物館には、よく見ると世界中の作家による作品が展示されており、中には日本人作家の作品もあった。島で買った、ガラスの飾りがついたリキュール瓶の栓はお気に入りのお土産の一つだ。

（4）研修先の写真

ヴェネツィア短期研修報告書

学部、学年：社会福祉学部、1回生

1.はじめに

私はヴェネツィアに行ったこの短い期間でたくさんのことを学んできた。ヴェネツィアに住んでいる人たちの人柄、生活、食文化、絵画や歴史。テレビの画面やスマートフォン越しの動画ではわからないことを直に体験することで、本物のイタリアに近づくことができた。そのことについて、簡単に紹介していきたいと思う。

2.「みんなで取り組む4つの課題」に関する報告

Ⅰ高知・日本に関するプレゼンテーションについて

私たちのチームは日本の文化のひとつである妖怪について紹介した。その際に妖怪を「擬人化」したオリジナルキャラクターやそのキャラクター達を描いた漫画やアニメーションを制作し、パワーポイントと共に発表した。結果として、非常に喜ばれたと思う。パワーポイントの内容に関する問いかけをすると、すぐにリアクションをしてくれるし、学生らに「素敵な漫画だ！」と言ってもらえた。もともと漫画は恥ずかしかったため回収する予定でいたが予想外に喜ばれたため、回収することができなかった。でも、すごく嬉しかった。この報告書に書ききれないほどの嬉しさだった。自分の作品に少しだけ自信を持つことができた。また、学生らの中にはもともと妖怪に興味を持ってくれている人たちがいて、卒業論文で妖怪に関する内容を書こうとしている学生らや、妖怪とポケモンの関係性についての卒論を書こうとしている学生の話を聞くことができた。また、彼らが使用するテキストの名前が「河童」だということも教えてもらった。日本の妖怪が多様な形で受け入れられているのだな、と知ることができた。

先輩方の河童を折り紙で折るという講習もすごく喜ばれたと思う。日本人の私が難しいと感じるものだったので大変だったと思うが、学生らは丁寧に折り目を付けて河童を制作していた。他の先輩方が言うにはSNSにその河童の折り紙の写真をあげている学生らもいた模様である。とても楽しい時間だった。

よさこいについて紹介するチームの発表では、学生らは楽しそうによさこいを踊ってくれた。高知出身の私にとって地元の祭りが好まれるというのは、すごく嬉しいことである。私の実家はよさこいに使用する鳴子や衣装のデザインをする会社で、留学から帰った後、海外の方が喜んでくれたこと、よさこいを紹介してくれたチームの人たちはみんな高知出身ではないことを父と話した。すると、父は「今のよさこいは県外の人や海外のひとありきのお祭りだから。そうしないとよさこいは続けていけない」「イタリアからのチームはまだ聞いたことないかもしれない」と言っていた。カ・フォスカリのチームができて、いつか高知県に踊りに来てくれる日が来たらいいな、と感じた。国際的な交流は他国

のいいところを学んでいくことだ、と思っていたが、その考え方はかなり古かったようだ。国際的な交流をすることは自国の文化を伝え守ることに繋がるのだ、と学ぶことができた。

II ヴェネツィア食文化の探求

基本的に何を食べてもおいしかった。その中でもいくつかピックアップして紹介しようと思う。まずは、ピザである。日本のものより生地は薄めであるのに、しっかりと小麦の味がする。そしてその上に乗っている具の香りがとても良い。特にプロシュートの香りがすごく良くて、持って帰ることのできるピザをホテルにつくまでずっとその香りをかいでいたほどである。次に、パスタである。安くておいしい店を現地の学生らに紹介してもらい、その店のパスタを２日に渡り食べた。私は１日目にボロネーゼ、２日にトマトソースのパスタを食べた。このパスタは普段日本で食べているものよりも麺が太く、歯ごたえがあって食べやすい。量は多いわけではないのに、すごく満足感があった。このような太さの麺を「ビゴイ」（聞いたままの発音で表記）と呼び、ヴェネツィアの伝統的なパスタの種類であると学生らから聞いた。日本にも出店してほしいと思うほどに美味しかった。
３つ目に、ラザニアである。高校生の時に食べたことはないが、どうしても食べてみたいという衝動にかられ、ラザニア麺をインターネットで注文して自宅で作ったことがある。しかし、もう２度と自分で作らないと思うほどに、本場のラザニアは美味しかった。２店のラザニアを食べたが、どちらも違う良さがあった。１店目のラザニアはチーズとホワイトソースが濃厚で、ものすごくクリーミーだった。濃厚なのに、重くないのである。くちどけはなめらかで、２皿も食べてしまった。２店目はお肉がごろごろとしていてジューシーで、食べ応えがあった。ラザニア麺と肉のコンビネーションが最高で、あふれ出る肉汁を包むラザニアの小麦の香りが素晴らしかった。４つ目に、ジェラートである。１日１ジェラートの目標を掲げ、ほぼ毎日みんなでジェラートを食べていた。どの店でもイチゴを頼むようにしていたが、日本のイチゴアイスよりも酸味が強く、すっきりとした味わいだった。また、店舗によって果肉がごろごろのもの、クリーミーでなめらかな、比較的日本のアイスクリームに触感が近いものなど、違いがありその違いを楽しむこともできた。また、初めてピスタチオ味のジェラートを食べたのだが、驚くほどなめらかで、良い香りで、堪らない気持ちになるものだった。

同じ料理でも店舗によって作り方の特徴や、味、見た目が異なることから、やはり食にこだわる国ならではの力の入れ方をしているのだな、と知ることができた。また、トマトやチーズ、日本で食べられるものだけれど、味が異なることから、ここにも製造方法の違いがあるのではないか、と考える。日本に留学した学生らが口をそろえて言うことは、日本全国に建設されている某イタリア料理レストランチェーン店の料理は、イタリア料理ではないとのこと。その店は高知県にないため、私は行ったことがないが、いつかの機会に行ってみて本場のイタリア料理との違いを感じてみたいと考えている。

写真１
「ビゴイ」と呼ばれていたパスタ。
レポートで紹介しているお店とは別のお店で食べた料理。うどんより少し細いくらいの麺と、少し硬めの歯ごたえが癖になるのが特徴。

写真２
カ・フォスカリの食堂でハンバーガーを食べる私。大きいのに重たくない。肉の味がしっかりとしていてすごくジューシーだった。マスタードが苦手な私でも食べれるほどに雑な辛さがないマスターードが入っていた。レタスやベーコンなど、具がたくさんなのに、統一感があるのが、流石食に強い国イタリアのハンバーガーだ…と思わされた。

写真３
生ハムのピザ。中央に乗っている白い塊はチーズで、同行してくれた学生の故郷の特産品だという紹介を受けて食べてみた。ショートケーキのクリームのように濃厚で少し甘くて、その甘さが生ハムと相性抜群だった。私の知らないチーズの味を知ることができた。

写真４
ヴェネツィアについた初日に食べた夕食。ここのラザニアがとっても美味しかった。イカ墨のパスタや、大きなエビ、ラビオリなどあるものをみんなで頼んでシェアをして食べた。
料理より先にパンが席に届くのだが、日本の居酒屋で言うお通し感覚なのかな、と思いきや、これでお皿についたソースをぬぐって食べることを知った。ソースまであますことなく美味しく食べるためのコツなのだな、と勉強になった。

Ⅲ文化・芸術の探求・美術館編

現地の学生ひとりの案内と共に、私たちはアカデミア美術館に行き、絵画や彫像を鑑賞してきた。やはり、キリスト教の国ということで、聖書関係の絵画が非常に多かった、想像していた以上に多かったため、やはりみんな信心深いのか、と気になっていたところ、一緒にいた先輩が、「毎週教会に行ってお祈りをするのか」という旨の質問を、同行してくれていた学生にした。どうやら若い人はそこまでらしい。実際、これはどういう絵画なのかと説明を求めたところ、彼女はわからないと答えることもしばしばあった。日本の若い世代が日本の神話や仏教的な話なんて興味がないのと同じだな、と感じることができた。中世に描かれた絵画はあまり上手ではない、という話を聞いていたが流石ルネサンスが始まった国イタリア、そんなことはなかった。中世のキリスト教の絵画はのっぺりとしたものであるというイメージがあるのだが、肌の陰影や布の重さ、装飾の細かさなど、私の知らなかった中世の絵画を見ることができた。

次に、ブラーノ島のガラス細工も一種の芸術ということで一緒に紹介しておきたいと思う。ガラス細工のお店が、細い道の隣にずらりと立ち並ぶ風景は、京都や金毘羅さんでよく見るようなお土産屋さんがたくさんのマスコットやら菓子やらが売っている場所を想起させる光景だった。しかし、店によって並んでいる商品は違う。ペンダントや指輪、置物やお皿。その産業によって島全体が賑わっている雰囲気を感じることができた。

Ⅳ文化、芸術の探求・歴史上の人物編

私は高校時代からイタリア出身の偉人、ジャコモ・カサノヴァについて興味を持ち、ず

っと調べていた。今回彼の出身地であるヴェネツィアに行くことができたため、彼が現在イタリアに暮らしている人々らにどのように受け入れられているのかの調査、カサノヴァにゆかりのある地を巡る調査を行った。

始めに、カサノヴァがどのように受け入れられているかの調査結果を紹介する。まず、カ・フォスカリの学生らに「カサノヴァという人物を知っているか、知っているなら、彼についての情報をなんでもいいから教えてほしい」という旨の質問をした。その際に帰ってきた返答は「有名だとは思う」「歴史の人だね」「色んな女の人と交際していた」「『カサノヴァ』という名前は、新しい家という意味」「女遊びが激しい人のことをカサノヴァと呼ぶ」「自分はヴェネツィア出身だけど、あまり知らないかも」という返答があった。特に面白かったのは、複数の女子学生に「悪い男！」と言われていたことと、男子学生に「悪い男じゃなくて、ただ女性が好きなだけだよ」と言及されていたことだった。しかし、日本で本で読んでいた以上の新しい情報は見つからなかった。おそらく、高知県の人にとっての坂本龍馬のようなものなのかもしれない。坂本龍馬は、おそらく高知県に住んでいる人のほとんどが彼のことを知っている。しかし彼が何をしたか説明してくれと言われて、事細かに説明できる人間はそこまでいないだろうと推測される。それと同じようなものなのだろうか、と感じた。次に、町で見かけた「カサノヴァ」について紹介する。ひとつめは、スーパーで売っていたパンの名前に「カサノヴァ」とつけられていたことである。レーズンの入っている固めのパンだった。なぜカサノヴァという名前なのか、原材料の説明の上に説明らしきものがあったため、それを翻訳したものの、その理由についての詳しい情報はあまりないようだった。ふたつめは、ガラス細工の店の名前に「カサノヴァ」とついていたことである。現地の学生らと回っている途中に見つけたため、中に入ったりなぜカサノヴァという名前の店にしたのかを聞いたりすることができなかった、残念である。しかし、カサノヴァという存在がヴェネツィアの人の中に残っているのは事実なのだ、と感じた。

次に、カサノヴァゆかりの地を巡るフィールドワークの結果について紹介する。今回行くことができたのは、ドゥカーレ宮殿、ため息橋、カフェフローリアン、そして現地の学生に教えてもらった、かつてカサノヴァが住んでいた家であろう場所である。ドゥカーレ宮殿内部は、時間の関係で入れず、ため息橋内部は調べたところおそらくはいれなさそうだと判断し、カフェフローリアンは現地の学生らに「高いからやめなよ！」と止められたため店内に入れず、かつてカサノヴァが住んでいたとされる場所はピザ屋になっていた。なんともまあ、残念な結果ではあった。しかしカサノヴァがかつて歩いた場所、見たであろう景色、その身に受けたであろう潮風を感じられただけで割と満足である。

最後に、ヴィヴァルディの楽曲のリサイタルについてのことも言及しておく。先生がヴィヴァルディの楽曲が聞けるリサイタルがあるよという紹介をしてくれたため、みんなで行くことにした。中学生の時にクラシックの良さを知り、CD を買い集めていた私にとって、素晴らしい機会だった。ヴィヴァルディが作曲した楽曲「四季」のうちの「冬」は私

のお気に入りの楽曲の１つだったので、生演奏で聞くことができてとても嬉しかった。また、彼が活動していたピエタ教会内部に入ることができたのも大変喜ばしいことだった。すごく貴重な体験だったと思う。

写真５
「CASANOVA」と名前の付けられたパン。硬めで、レーズンが入っていた。イメージとしてはハードなパウンドケーキ、もしくはスコーンに近い。カサノヴァとどういう関係がある食べ物なのだろうか。

写真６
CASANOVA という名前のついたお店。見つけた瞬間テンションが上がってしまって、写真を撮っていたら先輩方と現地の学生たちとはぐれそうになった。カサノヴァもこの場所に立ち寄ったことがあるのだろうか？

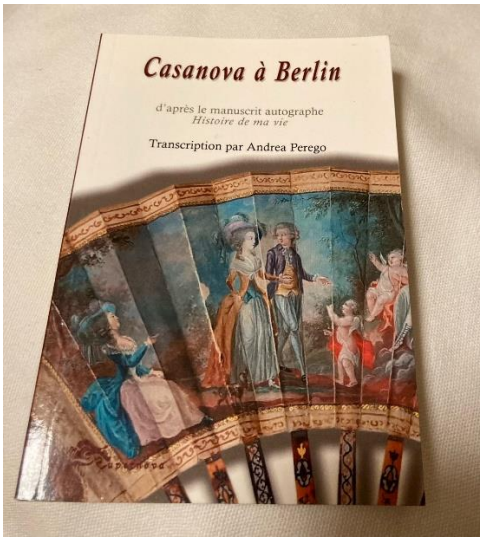


写真７
ブラーノ島のガラス博物館で何故か発見したカサノヴァの本。フランス語で書かれている。というのも、カサノヴァが生きていた当時、ヨーロッパでメジャーだった言語がフランス語であったため、彼もフランス語で自身の回想録を綴ったのである。カサノヴァはいろいろな国の言語を話すことができたが、勿論私はフランス語なんてわからない。翻訳機を使って解読していく予定である。

写真８
カサノヴァが訪れたと言われるカフェ・フローリアンの写真である。非常に古いカフェなので内装や外装にとても趣があった。しかし値段が高いため中でコーヒーを飲むのは断念した。いつかまた行く機会があったら次は絶対にコーヒーを飲みたいと思う。

3.現地の学生と交流してみて

かなり多くの学生が、日本のアニメが好きで勉強を始めた、ということを言っていた。アニメや漫画が大好きな私はとても嬉しかった。ヴェネツィアには面白いマンガやアニメはないのか、と質問したところ日本のもののほうが面白いよという意見も聞くことができた。好きを勉強につなげることができるというのはとても素敵だなと感じることである。日本の大学や専門学校は将来のために行くもの、という印象があるからだ。将来のためではなく好きだから勉強する、好きだからわかりたい、また、話を聞いた人たちのほとんどがヴェネツィア外から来ている学生だった。わざわざ遠くから、日本語の勉強をするために大学に来ているのである。日本と違う文化圏なんだなと改めて考えることができた。また、私も漫画の影響でイタリアを好きになって、ここに来たいと思っていたんだと話すと、彼らも喜んでくれた。そこは、日本とイタリアで一緒なのだなと感じた。

また、彼らはとてもフレンドリーで複数人と SNS の連絡先を交換し合った。これからも交流を続けていきたいなと考えている。

4.まとめ

自分の足で海外を見てきて、日本と似ている所、異なる所をたくさん発見することができた。もっとイタリアという国を好きになったし、日本にももっと愛着が湧いた。これからも海外の文化を学ぶこと続けていきたいと決意できたため、いい経験になったと思う。

また、他人としゃべったり、交流したりするのが苦手な私だったが、カ・フォスカリでは複数の学生にいろいろ自分から話しかけたり、聞いたりすることができた。また、あまりかかわりのなかった先輩方とも楽しくすごすことができた。誰かと関わることに対して

少し前向きになれたかもしれない、と思った。

写真９
サン・マルコ広場にある大鐘楼。高校時代にこの大鐘楼を描き、賞を貰ったことがある。その時の絵をカ・フォスカリの学生に見せると、すごく喜んでくれた。自分の「好き」が認められるということがこんなにも嬉しいことなんだ、と勉強になった。

2023 年度　ヴェネツィア　カ・フォスカリ大学短期研修報告書

看護学部　1 回生

１）活動概要

私は、9 月 19 日から 9 月 24 日の間、イタリアのヴェネツィアに滞在し、様々な活動に参加した。日本では経験をすることができないような習慣や文化、伝統などを直接体験することができ、とても身になる研修になったと考える。

始めの 3 日間は、カ・フォスカリ大学の日本語学部の授業に参加させて頂き、現地の学生と交流を行った。授業の主な内容は、現地の学生と日本人の留学生で 5 人程度のグループを作り、テーマについて日本語を用いて自由に会話を行うというものだった。さらに、20 日の授業では、高知についてのプレゼンを行い、よさこい鳴子祭りについて紹介をした。鳴子について説明をし、実際に鳴らしてもらったり、簡単なよさこいの踊りを現地の学生と踊ったりして、楽しみながらよさこい鳴子祭りについて興味を持ってもらえたのではないかと考える。授業後には、現地の学生と一緒にカ・フォスカリ大学の食道で昼食をとり、ハンバーガーやフォカッチャなどを食べた。

4 日目は、カ・フォスカリ大学の学生 2 人にヴェネツィアを案内してもらい、昼食を海鮮のパスタを食べ、サン・マルコ広場やリアルト橋を見学し、歴史的建造物についての学びを得た。5 日目は、カ・フォスカリ大学のキャンパス内を案内してもらい、午後からは大学の学生と合流し数多くの中世の絵画が展示されているアカデミア美術館を訪れた。その後、水上バスを用いてサン・ジョルジョ・マッジョーレ島へ行き、教会を見て回った。6 日目は、ガラス作りが有名なムラーノ島とレース工芸や色とりどりの家の壁が有名のブラーノ島を訪れ、ガラスミュージアムなどを見て回った。

２）研修での学び・気づき

ヴェネツィアを訪れ、1 週間過ごしてみて気が付いたことは、大きく分けて 3 つある。1 つ目は、生活内の習慣や暮らしの方法の違いである。ヴェネツィアでは、人々が水とうまく付き合いながら生活を送っている。水が豊富で川が多く、細い道が多いため、交通手段は自動車ではなく、水上バスや水上タクシーなどの船を用いるのだ。確かに、バスやタクシー、救急車や消防車といった緊急時に用いられる自動車などもほとんど見かけなかった。最も印象的だったのは、野菜や果物が船上で、比較的安価な値段で売られていることだ。毎朝、新鮮な野菜を産地から直接持ってくることができるため、このようなことが可能になっているのではないかと考える。さらに、ゴンドラや水上バスでしか行くができないムラーノ島やブラーノ島は大事な観光資源となっていることから水はヴェネツィアに住む人々にとってなくてはならないものになっているのではないかと考えた。また、飲酒についての感覚も日本の感覚とは異なっていた。ヴェネツィアでは、アペリティーボと呼ばれる食前に飲酒を行う習慣がある。ヴェネツィア発祥のお酒であるスプリッツなど飲むのである。スプリッツ

とは、アペロールとスパークリングワイン、炭酸水を合わせたものであり、現地の学生と話をしていると必ず飲んで帰ってほしいと言われた。残念ながら、研修時 18 歳だったため飲むことは出来なかったが、ヴェネツィアに住んでいる方々の大切な品となっているのだなと感じた。さらに、日本では飲酒は夜に行うものという印象があるが、ヴェネツィアの町中を歩いていると、日中であるにも関わらずお店の前に用意されたイスとテーブルでスプリッツを飲んでいる光景をよく見かけた。このように、ヴェネツィアでの人々の習慣が観光の一環となり、世界中から観光客をあつめているのだなと考えた。

2 つ目は、コミュニケーション法やヴェネツィアの人々の趣味についてである。大学の授業に参加させていただき、同世代の方と接する機会が多かった。授業の中で 4〜5 人のグループに分かれ、日本語で会話をし、自国の文化の交流を行った。そこで、日本の文化である漫画やアニメ等の人気さを改めて感じることができた。海外でこれらが人気であることは研修前から知っていたが、クラスメイト全員がアニメを見たことがあり、8 割の人が好きだと言っていたことには驚いた。特に、「ジョジョの奇妙な冒険」はヴェネツィアが舞台になっていることもあり、人々の注目度が高かった。ヴェネツィアでは、チャンネルは 100 近くあるが、毎日同じ内容の番組を放送している。このことが漫画やアニメが人気な理由なのではないかと考える。また、授業内で折り紙をしたのだが、私が教える前にグループのメンバーは、それぞれ折りだしていた。そのため、日本の文化で人気なのは漫画やアニメだけではないのだなと気づかされた。

3 つ目は、建築物についてである。ヴェネツィア滞在中様々な歴史的建造物の見学を行った、その中で最も圧巻的で感銘を受けた建築物は、サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会である。サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会は 8 世紀から 9 世紀に建設されたカトリック教会最古の修道会ベネディクト会の教会である。白を基調とした宮殿で、外壁のいたるところに石の彫刻があしらわれている。さらに、中に入ると高さ 5 メートル程の絵画があった。サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会だけでなく、ヴェネツィアの町を歩いていると、このような建築物を様々な場所で見ることができた。ヴェネツィアには、ルネサンス時代と呼ばれる 15 世紀後半から 16 世紀にかけてヴェネツィア共和国とその周辺でヴェネツィア派という流派があった。絵画、彫刻、建築など様々な分野でその特徴は見られるが、一般的には絵画の流派である。絵画においてはデッサンを重視したフィレンツェ派とは異なり、画面の色を使って構築し、流動的で詩的な雰囲気で人間の感覚に直接訴えかける効果を追求した。また、ヴェネツィアには、鐘を鳴らすための高さが 100 メートル近くある鐘楼と呼ばれる建築物が多くある。中でも代表的なサン・マルコ広場にある鐘楼（しょうろう）は西暦 888 年頃から建てられた。本来の鐘楼の目的は「遠くを見渡し、いかに早く敵の軍艦を発見できるか」であり、海が近く海軍国家でもあったヴェネツィア共和国にとっては、「鐘楼」はなくてはならないものだったのだ。現在では、時刻を知らせる鐘を鳴らすための建築物となっているが、料金を払って上にのぼることができる鐘楼もいくつかあり、観光資源の一つになっている。サン・マルコ広場の鐘楼は、天文学者のガリレオ・ガリレイが地動説を証明する

ためにのぼったということでも有名であり、観光の名所としても人気となっている。

ムラーノ島のガラス博物館

ブラーノ島の景観

サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会

授業での折り紙

サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会の内装

サン・マルコ広場の鐘楼

2022年度ヴェネチア・カ・フォスカリ大学短期研修報告書

看護学部　2回生

1）活動概要

今回私は9月17日から25日にかけてヴェネチア・カ・フォスカリ大学短期研修に参加させていただいた。19日から21日の3日間はカ・フォスカリ大学の日本語の自由会話の授業や漢字の授業に参加した。自由会話の授業では、カ・フォスカリ大学の生徒と日本の文化や高知の名物、学生が日本に留学した時のことについて会話したり、習字のワークショップで学生に習字について教えたりした。また、20日には私たち高知県立大学の生徒がカ・フォスカリ大学の生徒に対して、2組のチームに分かれてプレゼンテーションを行った。一方のチームは高知のよさこい祭りについて、私たちのチームは妖怪をテーマにしたプレゼンテーションを行い、プレゼンテーションの中で紹介した妖怪である「河童」を現地の学生と折り紙で作成し、現地の学生と交流することができた。22日はカ・フォスカリ大学の日本語学科の学生にサン・マルコ広場やリアルト橋などの観光名所に連れて行ってもらったり、彼女たちのおすすめのレストランで一緒に昼食にパスタを食べたりした。23日はカ・フォスカリォスカリ大学の本部を訪れ、キャンパスツアーに参加した。その後、現地の学生と合流してアカデミア美術館に行き、水上バスの乗り方を教わって、サンジョルジョ・マッジョーレ島を観光した。夜はピエタ教会で開催されていたヴィヴァルディのリサイタルを鑑賞し、夜のサン・マルコ寺院を見てホテルに戻った。最終日は、先生と共に水上バスを利用して、硝子が有名なムラーノ島と、レース工芸やカラフルな建物で有名なブラーノ島へ行き、ヴェネチアングラスやレースのお店を見て回った。

2）研修での学び・気づき

今回の短期研修では、高知・日本に関するプレゼンテーションの実施と、ヴェネチアの食文化の探求、ヴェネチアの文化・芸術の探求という課題に取り組んだ。

一つ目の課題である高知・日本に関するプレゼンテーションの実施とその反応から気づいたことは、現地の学生は日本の文化に詳しいということである。私たちはプレゼンテーションの中で日本の中でメジャーな妖怪である「鬼」「河童」「天狗」を紹介したが、現地の学生は既にそれらの妖怪を認知している人が多かった。理由としては、数年前に「妖怪ウォッチ」というアニメが流行したことがあげられる。現地の学生の間では、日本と同じようなアニメや漫画作品が流行しており、アニメや漫画作品に疎い私をはるかに超える知識量を持つ学生が多くいた。学生の中には、アニメから日本に興味をもち日本語学科を志望したという人も少なくなかった。私は現地の学生と交流するまで、日本の漫画やアニメは海外の一部の人の中で楽しまれているものだと思っていたが、アニメや漫画は多くの学生に楽しまれており、もはや日本独自の文化としては認識されていないように思えた。また、現地の学生との交流の中で、趣味などについて会話する中で、現地の学生が興味を向けるものと日本の学生が興味を向けるものがほとんど変わらないように感じた。現地の学

生と日本で私が他の学生と盛り上がるようなアニメや動画配信サイトで配信されている動画、SNS で流行しているアイドルグループについて話をしたことで、インターネットの発展により世界中で同じようなものが楽しまれていることを実感した。

2 つ目の課題であるヴェネチアの食文化の探求では、事前に行ってみたいお店や食べてみたいものを調べたり、現地の学生におすすめのレストランを聞いたり、連れて行ってもらうことで、ヴェネチアの食文化について理解を深めることができた。ヴェネチアで有名であるパスタやピザ、ジェラートを食べる中で私が最も驚いたのは、ピザである。ヴェネチアのピザは、日本で食べるものとは異なり、生地に厚みがなく、ぱりぱりとした食感が特徴であった。そして、レストランのメニューでは 2〜3 ページにわたるほどピザの種類が豊富であった。何より私が驚いたのはヴェネチアの方々は一人一枚ピザを食べることだ。日本ではピザは複数人でシェアして食べることが多いが、ヴェネチアの方々は一人で一枚完食していた。私は、ヴェネチアで初めてカルツォーネという包み焼きのピザを食べたが、ピザ生地の中にたっぷりの生ハムとチーズが包まれており、一人で食べるのがとても困難であった。もう一つ私が驚いたのは、ジェラート店の多さである。ヴェネチアを歩くと、多くのジェラート店を見つけることができた。現地の学生にジェラートについて聞いてみると、多くの学生がお気に入りのジェラート店があり、ジェラードを食べる頻度も多いようであった。ヴェネチアの食文化を探求していく中で、現地の方々はシェアして食べるのではなく、一人で一つの料理を食べること、ジェラートとの結びつきが強いということを知ることができた。

3 つ目の課題であるヴェネチアの文化・芸術の探求では、アカデミア美術館やサンジョルジョ・マッジョーレ島などを訪れることで現地の文化には、キリスト教が強く根付いていることが分かった。アカデミア美術館絵展示されていた作品は、聖書に基づいたものが多かったり、サンジョルジョ・マッジョーレ島は島一帯が教会であったりしたことから、宗教と現地の方々との距離の近さを感じた。日本には一つの宗教を信仰している人があまり多くないことから、様々な宗教文化を取り入れているため、日本でのキリスト教のイベントと現地のキリスト教のイベントの違いを知ることができた。例えば、日本ではクリスマスは恋人と過ごすことが多いが、ヴェネチアでは家族と過ごす日であることを現地の学生から教えてもらった。もう一つ、ヴェネチアの文化・芸術の学んでいくなかで驚いたことは、カ・フォスカリ大学の建物についてである。日本の学校とは違い、カ・フォスカリ大学の建物はヴェネチアの歴史的建造物を借りて使用していた。そのため、使用料を払っていない中庭には入ることができず、打ち上げなどの特別なときだけレンタル料金を払って使用するそうだ。ヴェネチアに住む人は年々減少しており、街で見かける人のほとんどが観光客であるため、歴史的建造物を貸し出すことで、街の景観を維持しているらしい。確かに、ヴェネチアは水の街であることから、橋や段差が多く、移動手段は徒歩がほとんどで暮らすのには不便なように思えた。

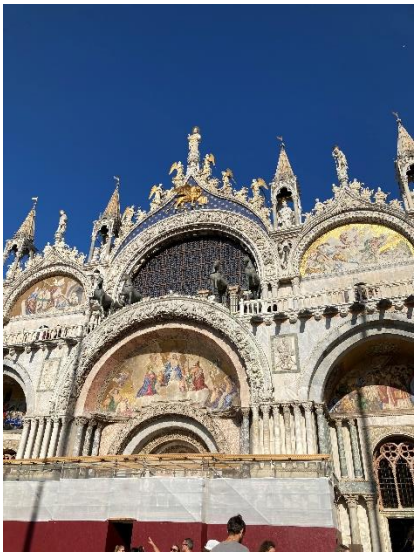
以上のような発見は、実際に現地を訪れて、話を聞かなければ知ることができなかった

ため、今回の短期研修を通して様々な発見や学びがあり、とてもいい経験になった。

3)その他

　今回の短期研修で、実際に現地を訪れたことで、食や芸術などの文化の相違点を自分の芽で確かめることができ、異文化交流への興味が増した。また、現地の学生と交流する中で、人のやさしさに触れることができた。初対面でも一緒にお昼ご飯を食べに行こうと誘ってくれたり、休日にヴェネチアを案内してくれたりと数々のやさしさを受け取って、私もお味用に誰かに無償のやさしさを届けたいと思った。

4)研修先での写真



2023年度カ・フォスカリ大学短期研修報告書

文化学部　4回生

(1)活動概要

カ・フォスカリ大学短期研修では、主に現地で日本語を学んでいるイタリアの学生と交流を行いました。カ・フォスカリ大学で実際に行われている日本語の授業に参加させていただき、日本語で自由に会話を行ったり、一緒に日本に関するプレゼンテーションを作成したり多くの交流をすることができました。特に日本語で行われる自由会話の授業に参加することが多く、自由会話の授業に参加した際には、自己紹介や、自分の専攻などについてイタリアの学生が日本語で流暢に説明しているのを聞き、とても驚きました。現地の学生と交流をしている中で、日本語に興味を持ったきっかけ等を聞くと、日本のアニメや漫画に興味を持って、日本語自体に興味を持った学生や、葛飾北斎が好きで日本の美術に興味を持ち、美術を学ぶために、日本語を学び始めた学生等、様々なきっかけを知ることができました。特に日本のアニメや漫画は知らない人がおらず、日本ではあまり有名でないアニメがイタリアでは非常に有名だったり、日本の漫画が大好きで自身で漫画を描いている学生がいたり、日本のアニメや漫画がどれほど世界で有名なのかを実感することができました。

また、カ・フォスカリ大学で日本人が習字を行うワークショップがあり、そのワークショップにも高知県立大学の学生皆で参加をしました。イタリアの学生が好きな熟語やアニメのタイトルなどを書くのを手伝い、一緒に習字を楽しみました。漢字を書くのはやはりとても苦手な学生が多く、最初は苦手な漢字を書く習字に躊躇っている様子でしたが、段々と習字の楽しさに気づき、ワクワクしながら次に何の漢字を書くか考えている様子がとても可愛く思いました。

カ・フォスカリ大学短期研修では、授業以外でも学生と交流する機会が何度もあり、自由会話の授業で知り合った学生と一緒にお昼ご飯を食べたり、街を案内してもらったりしました。授業の終わりにご飯に行くこともありましたが、授業がない日にもヴェネツィアのご飯屋さんやおすすめのジェラート屋さんを紹介してくれて、交流をする機会が多かったのがとてもうれしかったです。また、インターネットで調べただけではわからない、現地の学生の穴場スポットにもいくつか案内してもらい、学生と交流したからこそ分かる良い経験だったと感じました。

また、授業がない日に高知県立大学の学生だけで、水上バスに乗り、ムラーノ島とブラーノ島にも行きました。ムラーノ島ではガラスの美術館に行き、チケッティと呼ばれるヴェネツィアで非常に有名な食べ物や、ヴェネツィアに滞在している間ほとんど毎日食べていたジェラートを食べました。ブラーノ島では、有名なレースを見て、とてもカラフルな街並みを皆で楽しみ、記念撮影などをしました。

(2)研修での学び・気づき

今回の研修で、私は特に言語の違いに気づきました。日本は島国なので、言語も他の言語と似ていない点も多くあり、日本の学生が英語やイタリア語を学ぶことはとても難しいとカ・フォスカリ大学の先生に説明していただいたのですが、一方でイタリアは多くの国と隣接しているため、英語はもちろんフランス語やスペイン語など何か国語も話せる学生が多くいるということを知り、とても驚きました。日本では、中国語に影響を受けている単語やポルトガル語に由来する単語などがありますが、基本的には日本独自の単語が多いと感じます。ですが、イタリア語とフランス語では単語が非常に似ているものもあり、文法構造が他の言語と似ているものもとても多くありました。単語や文法構造が似ている言語がいくつもあることと、隣接している国があることから、イタリア語話者にとって言語習得しやすい言語があるというのは日本と大きく異なっていて、とても興味深い点だと感じました。

また、日本語の漢字については改めてその日本語の漢字がどれほど世界で難しいとされているのかに気づくことができました。日本語を話すのがとても上手な学生でも漢字はとても難しそうにしており、「永」と「氷」の違いが分からず、漢字を書くのを間違えてしまったり、漢字を教えるとすぐにサイトで書き順を調べて何度も書いてみたりする光景を目にして、その大変さを知りました。また、イタリア語で漢字を教えている授業に参加した際に、日本の小学生などに授業で漢字を教えるように、まず漢字自体を教えて、読みを教え、書き順、例文、と教えており、海外でも日本と同じように漢字を教えるのだと知ることができました。

また、日本のアニメや漫画、キャラクター等がどれほど注目されているかにも気づくことができました。日本にいる時にも、世界的に日本のアニメや漫画が注目されているということはニュースなどで知っていましたが、ここまで日本のアニメや漫画が当たり前のように知られているとは考えておらず、とても驚きました。例えば、私がサンリオのキャラクターのキーホルダーをカバンに着けていると、少し離れた席にいる現地の学生が、私もそのキャラクター好き！と声をかけてくれることが何度もありました。また、授業内でも度々日本のアニメや漫画の話題が出て、日本人よりも詳しい説明をしてくれる学生がおり、日本人が勉強になるという場面もありました。

そして、日本とヴェネツィアの土地や街並みの違いにも気づきました。日本は川や海に囲まれた地域などもありますが、ヴェネツィアはいたるところに小さな川が流れており、車やバスなどはほとんど通っていませんが、水上バスだけは定期的に通っているという違いが見られました。また、ヴェネツィアでは電柱がそのままで、建物もレンガで作られたような少しレトロな雰囲気がある物が多く、電柱が少なくなってきたり、どんどん街が発展していき、新しい建物が多くなったりしている日本とは少し違う街並みを見るのがとても興味深かったです。

(3)その他

今回の研修で、私は何よりイタリアの学生と多く交流することができたのがとても嬉しかったです。あまり海外に行く機会がないと、海外の友達も作ることができないので、この研修に参加して多くの海外の学生と交流をし、友達になることができて良かったと感じました。今でも継続的に連絡を取り続けている学生もおり、これからも交流を深めていきたいと思います。

(4)研修先の写真